

Publisher's Review

パブリッシャーズ・レビュー

●東京大学出版会・白水社・みすず書房のPR紙●



みすず書房の本棚

[無料送付]

No.15 2015 夏

(表示価格は税別です)

113-0033 東京都文京区本郷 5-32-21 tel. 03-3814-0131 http://www.msz.co.jp

脱成長社会の「正気」の技術を求めて

大谷卓史

脱成長社会の中で技術進歩を信じることが出来るか——本書を導く経糸となる問題意識はこれである。今後日本社会は少子高齢化に伴う人口減少を迎え、ゆっくりと衰退していくことが確実だ。その一方で、少子高齢化や人口減少がもたらす社会問題やエネルギー・資源・食糧などの問題解決に向けて、科学技術にかける期待は大きくなっていく。ところが、そもそも技術開発は、そのとりにあらずの外部である社会から供給される資源に依存しているわけだから、社会そのものが成長を終え、縮小・衰退局面に入ったとき、必ずしも技術開発が順調に進むとは限らない。つまり、技術開発そのものを維持する体力が日本社会にはな

くなっていく可能性がある。科学技術への漠然たる期待があるものの、十分な戦略と構えがない限り、ただただ技術開発に資金を投じていくだけでは社会はその体力を使い果たしていきただけではないか。このような明確な問題意識が本書にはうかがえる。本書は、科学技術の内と外から通じた二人の人物による対談と、各一編の独立した論説から成る。科学技術に対する熱狂(ハイブ)からは一歩も二歩も距離を置き、現代の科学技術と社会の問題を冷静かつ正気に考察するのが、本書の真骨頂である。対談では、原子力とエネルギーの科学技術史・科学技術政策研究者の吉岡斉と、「レイバソン」(市井の

人)を名乗る情報法学者の名和が、それぞれの得意分野を生かし、原子力とエネルギーに関しては吉岡が、情報社会に関しては名和が交互に語り手となる。もう一方の対談相手は聞き手となって、質問や感想、疑問を投げかける。この形式のおかげで、ほどよく話題が膨らむことで、いたずらに焦点を絞って専門的になり過ぎず、現代社会と科学技術がかかわる広い話題へと視線がうまく向いたように思う。

読者の目をまずは引くと思われるのが、3・11東日本大震災に伴う東京電力福島第一原子力発電所事故と、これを調査した政府事故調査委員会(政府事故調)についての、吉岡による解説である。彼はこの政府事故調査委員であった。福島第一原発事故に際しての機能不全に明らかのように、行政・東電は過酷事故への組織的な備えができていなかった。また、吉岡によれば、政府の思うように住民が動かないことが「パニック」と捉えられて情報公開が遅れ、自主的避難の道が閉ざされたという。原発事故後放射能雲の拡散予測を行うSPERDIも廃止が決まったとのことで、情報公開の程度は今後ますます下がるかもしれない。

また、政府事故調による当事者の聞き取り調査は委員に対してさえも情報公開が不十分で、事故の実態解明や今後の事故対策には活用が難しく、(朝日新聞の「吉田調書」のスクープ以後はやや状況が変わったらしい)。軍事技術をベースにできた技術は、本来、日本流の暗黙知的な品質保証ではなく、設計・製造・運用のすべてが記録に残され、適切な責任者に報告されるという文書主義が貫かれているはずなのだが、日本の原子力発電所はそうではなく、これが行政や東電の事故の際の機能不全の原因の一部だったのではないかと、吉岡の話を聞いて、名和は指摘する。また、SPERDIは仕様さえ公開すれば、篤志家が勝手に同じようなソフトウェアを開発してくれるのではと、オープンソースソフトウェアの発想から、名和は期待する。本書では、こうした発想のやり取りがあちこちにみられ、異分野の知識が会うことで、新しい提案が生まれる現場を覗き見る喜びを覚えてきた。多くの読者も新しいアイデアや知的刺激が得られるのではないかと、技術の語り口もおもしろい。たとえば、吉岡は、独立の論考で、高速増殖炉「もんじゅ」の完成が長期計画を立てることに遅れる問題を論じ、観測できる宇宙の限界が光よりも速く遠ざかるハッブルの法則のように、時間がたてばたつほど完成の見込みが未来へと遠ざかると皮肉に指摘している。このたとえには思わず吹き出してしまった。

脱成長社会でも技術者はブレークスルーを狙い続けるだろうし、これが社会に副産物として利益ももたらさざる。法律や制度は技術をコントロールしようとするが、技術や現実には常に法律や制度をはみでてしまう。部分最適だけでも目指すとしたらどうするか。最後の論考で示される名和の回答は、やや悲観的で、文書主義と相互監視が部分最適化の基盤となる社会的信頼をもたらすというものだ。

名和の直観を敷衍すると、社会による(相対的)統御は文書主義で、科学技術者集団の(相対的)自律は相互監視で、ということになりそう。読んで元気になるという類いの本ではないが、本書は、技術への過度な熱狂を相対化する「正気」を取り戻すために役立つだろう。吉岡と名和のものとの読者にとっては二人の知的交流の背景が窺えることも興味深いだろう。初めての読者にとっては、現代科学技術を論じる代表的な二人の論者の著書への手引きとしても魅力的なはずだ。

(おおたに・たくし 情報倫理学・科学技術史)

未来世代への責任を探求する 科学・技術論

吉岡 斉/名和小太郎
《技術システムの神話と現実
原子力から情報技術まで》

科学・技術論の語り手として理想的なお二人に、現代の技術がはらむ問題について論じていただいた。以下の8テーマを語り、さらに「高速増殖炉開発の未来」「情報セキュリティ」についての書き下ろし論考を加え構成した。

- 1 核施設の過酷事故/2 コンピユータ西暦二〇〇〇年問題/3 SPERDI(緊急時放射能影響予測)
- 4 グーグル/5 放射性物質の隔離管理/6 知的財産権/7 再生可能エネルギー/8 自動機械(人工知能)

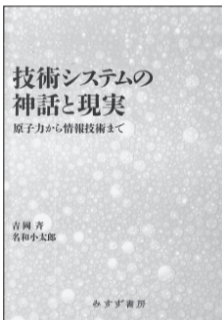
名和氏の得意分野は情報技術であるのに対し、吉岡氏の得意分野は原子力・エネルギーの現代史である。得意分野を異にする二人が、自由な発想による対話をいかに想像力豊かに展開し、読者の知りたい核心・関心に応える本をつくるかを突き詰めた結果、「テーマの「提案者」と「受け手」を交代して対話を進める方式

にたどり着いた。この方法によって両者の個性が活きて、多角的な内容となった。

8テーマを選ぶ基準は、「重要インフラを論じる」ということ、これが本書の出発点であり目的である。対談形式を取ったことにより、個々の議論が専門家以外にも読みやすく、取っ付きやすくなっている。読者諸賢の関心の強い順に読んでいただければ幸いである。

技術システムの持つリスクに対して、どう対処していけばよいのか? 現場に通じた二人の議論は非常に説得力があり、示唆に富む重要な知見が示されている。数々の提言が問題のありかを腑分けし、それらの考えが、現代テクノロジー社会がもたらす危機を回避する一助となるだろう。

新しい科学・技術で得るものは何か、失うものは何か。本書は未来世代への責任を探求する科学・技術論



「日本社会は二世紀を迎えるとともに社会・経済活動の諸指標(とりわけ人口)が低落傾向となる(脱成長時代)に入った。それは今後も長く続く。人々の健康で文化的な生活を保障し、社会的連帯を劣化・崩壊させないための仕組みの構築が必要である。そのような未来社会の構築に役立てられてこそ、現代技術はその真価を発揮することができる。その実現のために、微力ながら引き続き尽力したい」(あとがきより)

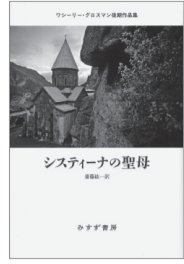
〔現代社会・科学技術〕
(四六判・248頁・三二〇〇円)

原因の一部だったのではないかと、吉岡の話を聞いて、名和は指摘する。また、SPERDIは仕様さえ公開すれば、篤志家が勝手に同じようなソフトウェアを開発してくれるのではと、オープンソースソフトウェアの発想から、名和は期待する。本書では、こうした発想のやり取りがあちこちにみられ、異分野の知識が会うことで、新しい提案が生まれる現場を覗き見る喜びを覚えてきた。多くの読者も新しいアイデアや知的刺激が得られるのではないかと、技術の語り口もおもしろい。たとえば、吉岡は、独立の論考で、高速増殖炉「もんじゅ」の完成が長期計画を立てることに遅れる問題を論じ、観測できる宇宙の限界が光よりも速く遠ざかるハッブルの法則のように、時間がたてばたつほど完成の見込みが未来へと遠ざかると皮肉に指摘している。このたとえには思わず吹き出してしまった。

脱成長社会でも技術者はブレークスルーを狙い続けるだろうし、これが社会に副産物として利益ももたらさざる。法律や制度は技術をコントロールしようとするが、技術や現実には常に法律や制度をはみでてしまう。部分最適だけでも目指すとしたらどうするか。最後の論考で示される名和の回答は、やや悲観的で、文書主義と相互監視が部分最適化の基盤となる社会的信頼をもたらすというものだ。

名和の直観を敷衍すると、社会による(相対的)統御は文書主義で、科学技術者集団の(相対的)自律は相互監視で、ということになりそう。読んで元気になるという類いの本ではないが、本書は、技術への過度な熱狂を相対化する「正気」を取り戻すために役立つだろう。吉岡と名和のものとの読者にとっては二人の知的交流の背景が窺えることも興味深いだろう。初めての読者にとっては、現代科学技術を論じる代表的な二人の論者の著書への手引きとしても魅力的なはずだ。

(おおたに・たくし 情報倫理学・科学技術史)



ワルシャワの北東九〇キロほどに位置するトレブリンカ絶滅収容所では、一九四二年七月の開所から四三年十月に放棄されるまでに七〇万人以上のユダヤ人が殺害された。一九四三年八月二日にユダヤ人特別労働班の叛乱が起こり、収容所内の建物の多くが放火され焼き払われたため、ナチスドイツは閉所を決定。この地は通常の森と農地のように偽装された。そのため実態はほぼわかっていない。真相を突き止める困難は、NHKで放送された「トレブリンカ 発掘された死の収容所」で描かれた通りである。

生還者が伝える死の収容所の実態

サムエル・ヴィレンベルク
《トレブリンカ叛乱》

近藤康子訳

翌年八月の叛乱に加わり脱出、その後生き延びた数少ない一人である著者は、四十数年たつて本書を書き上げた。ガス室に送られた人たちの衣類や所持品の整理にはじまる一年近くわたる日々の記録は、そこで行われた蛮行からシステムのからくり、仲間同士の助け合いまで、死の収容所の実態を生々しく伝える。当事者によるこの記録によつて、われわれは初めて多くを学び知ることができるだろう。「現代史」【七月下旬刊】(四六判300頁・予四〇〇〇円)

『人生と運命』の作家、短篇ほか初集成

V・グロスマン 《システイナの聖母》
ワシリー・グロスマン 後期作品集

『人生と運命』の作家がスターリンの死(一九五三年)以降に執筆した短篇小説。随想・旅行記を初集成する。

た母子を見出す「システイナの聖母」。経済的に困窮し、仕事で出かけたアルメニアはアラト山の谷、旧約聖書の土地で信仰をもたない作者に訪れた宗教的な体験と思索を綴る「あなた方に幸あれ!」

「秋の四重奏」から日本でも読者を待たせ。おひとりさま小説「よくできた女」とともに『幸せのグラス』は、ピム前期ユーモア小説の双璧をなす長編である。

皮肉で素敵な女性小説

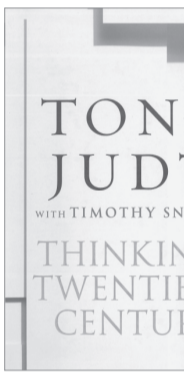
バーバラ・ピム
《幸せのグラス》

「秋の四重奏」から日本でも読者を待たせ。おひとりさま小説「よくできた女」とともに『幸せのグラス』は、ピム前期ユーモア小説の双璧をなす長編である。



うめばれたダメ女ウィルメットを、どこまでも軽やかな筆致で読者に憎ませない巧みさは、二〇世紀のオースティンの名に恥じない。

生誕百周年を過ぎて人気衰えず、詩人ラーキンが本作をピムのなかで「もっとも巧緻な最高傑作」と言っている。「イギリス文学・女性小説」(四六判・376頁・三三六〇〇円)



知識人の功罪を問う

トニー・ジャット
聞き手 ティモシー・スナイダー
《20世紀を考える》
河野真太郎訳

最後に着した本のテーマは、二〇世紀の知識人、政治思想の闇と光、罪と罰である。大著『ヨーロッパ戦後史』は高い評価と多くの読者を得て一挙にジャットの名を広く知らしめた。しかし難病で余命いくばくもない日々が彼を待っていた。極度の格差社会を社会民主主義再考の視点から批判するメッセージ「荒唐する世界のなかで」を発表し、自身の思い出を知的伝記にまで昇華するエッセイ「記憶の山荘」を連載することが精一杯。頭脳明晰なまま運動機能は徐々に麻痺していった。若き東欧史家スナイダーはジャットに長い対話を提案した。自宅の居間で電動車椅子にかけたジャットが語ったことを原稿にして校正させる。こうして成った本書は、リベラル、社会主義、共産主義、ナシヨナリスト、ファシストの思想家たちが発した言論の限界と失敗、そして義務と再生の可能性をめぐる自由闊達で生き生きとした批評となっている。ケストラー、アーレント、アロン、バーリン他、ミウオシユヤハヴェルら東欧にも及ぶ。全体を貫くのはジャットがたどった激しく誠実な一本の道の道だ。「現代史・政治思想史」【六月下旬刊】(四六判640頁・予五五〇〇円)

目にくらむような作品

ブルース・チャトウィン
《ウイダーの副王》

他者について語ることの倫理と政治
G・オベール・カラ 《キヤプテン・クックの列聖》
中村忠男訳
太平洋におけるヨーロッパ神話の生成



「何ゆえにこうした神秘に惹きつけられるのか、彼にはついにわからなかった。流血のせいなのか? 神のせいなのか? 汗の匂いや、濡れて光る肉体のせいなのか? この熱中を断ち切るうにも彼の力はまったくおよばず、結局アフリカが彼の運命なのだ」と納得して、彼はアフリカの花嫁をめぐらした。

一九七〇年代、西アフリカのベナンから、この物語は始まる。ダ・シルヴァ一族は各地から集結して、開祖フランシスコ・モノエル没後一七七年を記念する贅の限りを尽くした祝宴を繰り広げていた。開祖はブラジルでの極貧生活に見切りをつけ、一八二一年に大西洋を渡って奴隷商人として身を立えた。ダホメー王から「副王」に任じられ巨万の富を築き権勢を振るう。しかしその栄光は長続きしない。やがて彼は……。

もともとは偉大な航海者にして、ポリネシアの発見者、ジエイムズ・クック。一八世紀末にハワイ島に上陸し、当地の神である「ロノ神」が降臨したとして歓迎を受けた。誰もが認めるこの定説に疑問を呈したのが本書の著者、オベール・カラである。

文明の使者クックを野蛮人であるハワイ人が神と崇めたというのは本当なのか。航海誌の詳細な分析で浮かび上がるのは、「ヨーロッパ人」という神「こそが、当のヨーロッパ人が創造した神話だ」ということである。



著者既刊 『黒ケ丘の上で』
榎本伸明訳 (三七〇〇円)

一七七七年のトンガ滞在に始まり一七九九年のハワイでの死で終わる「人道主義者」クックの暴力の痕跡を克明に辿り、イギリス人がもたらした暴力がハワイ人の対抗暴力

を生き、暴力の連鎖が文化の差異を鏡像的に溶解すること明らかにする。本書はアメリカ人類学でもっとも著名な人物でオセアニア研究の第一人者であるマイナル・サーリンズに真っ向から論争を挑み、その後十年にわたる論争を巻き起こした。ヨーロッパ人の神話形成と現代の学問との連続性を浮かび上がらせ、他者について語ることの倫理と政治を切り開いた、アメリカ人類学最大の論争の書である。

みすず書房新刊

(2015.3.6)

東京・文京本郷5
区三三三(〇三三)
(価格は税別です)

福島に農林漁業をとり戻す

濱田武士 小山本太 早尻正宏 漁農林業経済学研究者が原発災害からの復興という難題に科学的知見から道筋を示す。三五〇〇円

コミュニケーション

多文化共生社会のコミュニケーション
水野真木子 内藤裕 医療・司法・行政通訳を柱に、手話通訳や難民申請、災害時の通訳も。未来像を提示する初の概論。三五〇〇円

相互扶助の経済

無償講義 報徳のナジタ 徳川期の民衆の編み出した「セーフティ・ネット」が今経済倫理に何を示唆するか。五十嵐暁郎監訳 福井昌子訳 五四〇〇円

近代デザイン美学

高野啓介 デザインにおける鍵概念「近代」(モダン)はどう定義できるか? デザイン用語の再検討を通してその内実を探る。三八〇〇円

ヘイト・スピーチという危害

オールドロン ヘイト・スピーチは社会の何を壊すのか。危害の定義から法規制の根拠までを明らかにする。谷澤川岸訳 四四〇〇円

不健康は悪なのか

健康をモラル化する世界
メツルほか編 精神医療 遺伝子医療 原子力政策…多面的考察から「健康」のあるべき姿を思索する。細澤仁ほか訳 五〇〇〇円

長田弘全詩集

最初の詩集から五〇年。詩集一八冊、四七一篇の詩を収める唯一の完成版。本書に全力を注いで通った詩人の人生「重版」六〇〇〇円

長田弘の詩集 重版出来

以下の詩集も好評発売中です
詩の樹の下で
FUKUSHIMA REQUIEM 39篇
われら新鮮な旅人 definitive edition
鮮烈なデビュー。永遠の青春賦

奇跡—ミラクル—

ほんとうの奇跡—ミラクルとは何? 静かに、ゆつくりと読みたい一冊の詩集。新境地をひらいた、毎日芸術賞受賞作。一八〇〇円

一日の終わりの詩集

もうこれからは惜別の人生を覚えねばならない。二十世紀という長い一日。その終わりの秋の沈黙に充ちた言葉「私詩篇」一八〇〇円

死者の贈り物

ひとの心のちばん奥に就後にふしぎな明るさをのこす。あたたかな悲しみと静けさと透明な思念にみちた詩篇/無言歌。一八〇〇円

人はかつて樹だった

たまたま樹が思いださせる、原初の記憶
各一八〇〇円

世界は一冊の本

「本を読もう。もう一冊本を読もう。」
世界はうつくしいと
寛ぎのときの詩集。三好達治賞受賞
各一八〇〇円

書評コラム

福島について、知らないことが多すぎる。本書を読み終えての率直な感想である。福島の歴史、風土、そして今抱えている本質的な問題と、これらをふまえた復興への道筋を十分に理解していない、と言いつけるべきかもしれない。

著者らは、経済的実害やインフラの損害だけではなく、「社会関係資本の損害」に対処する必要性を説く。とりわけ農林漁業は「自然と共生するなりわい」であり、その土地、森林、海に馴染む人々による営みである。ところが、国をはじめとする対策は、こうした点にほとんど目が向いていないという。

福島の復興とはほとんど無縁の応援イベント、省庁縦割りによる個別の法律運用や省益に固執した仕事の押し付け合い、除染のめどが立たない中での施設建設計画等々。農山漁村の暮らしのサイクルを尊重しながら、人と人、人と自然との関係を紡ぎ直すという視点の欠如である。



北川太一 濱田武士・小山良太・早尻正宏 『福島に農林漁業をとり戻す』を読む

「始まり(＝原発建設)も終わり(＝今回の事故)も原発に翻弄される」という、森林組合関係者の言葉



「いや、おそろしくミーシャだけじゃない。私が知らないだけで世界中にそんな猟師がたくさんいる。いま、目の前でカリブーをバラすミーシャがその証拠だ。 猟師だけにとどまらない。木こり、漁師、遊牧民、農師、なんでもいい。世界中にミーシャがいる。だとすれば、そう考えて私は静かで深い昂りに包まれた。だとすれば、まだ人類は信じるに値する。世界は生きるに値する。この世はとんでもなく面白い」

鹿撃ち岩魚釣り、そして山へ

服部文祥

《ツンドラ・サバイバル》

ら二〇年、釣りの鉄砲もすっかり板についてきた。サバイバル登山は円熟に向かいつつある。夏の南アルプスでの墜落事故。その現場への再訪と再起。より深い狩猟登山を求めて晩秋の北海道へ。そして、隕石湖に生息する新種のイワナを求めて、一カ月におよぶ北極圏横断の旅へ。広大なフールドで展開されるサバイバル・ノンフィクション。



J・フロイド《弁当の時間》 Woodhorn Museum

「鉦夫たちがまるで丸太ん棒みたいな、労働に虐げられた存在として描かれるのにへたが出るくらいあきあきしていた。俺たちはそんな描き方にもっとリアリズムを加えようとした」(オリヴァー・キルボーン、鉦夫画家)

鉦夫画家たちの仕事と暮らし

ウィリアム・フィッシャー《イングラント炭鉦町の画家たち》 乾由紀子訳

詩人と芸術家の深いつながり

「アウシュヴィッツ以後」の詩の姿を示したパウル・ツェラン。その痛みに満ちた豊穡な詩は、戦後文学・思想に決定的な影響を刻印した。かたやアンゼルム・キーファーは、ナチス式敬礼のポーズをとる自身の姿を撮影した作品「占領」をはじめ、ドイツの負の歴史をあえて呼び覚ます美術作品で衝撃を与えた。ユダヤ性とドイツ性、被害と加害と、相反する立場に見えるツェランとキーファーの作品には、実は深いつながりがある。

詩人がのこした贈り物

長田弘 《最後の詩集》

去る五月三日に亡くなった詩人による「最後の詩集」。昨年の秋も深まる頃、『長田弘全詩集』の構想を提案すると、詩人はいつもの笑顔で言った。「この全詩集の後は、最後の詩集、になると思いませんか。覚悟とか懸命とか悲壮とかを嫌っていた。詩人は絶対に陽気でなければならぬ、というのが長田弘さんの一貫した姿勢だった。 『夏、秋、冬、そして春』『冬の金木犀』『朝の習慣』他十五篇。これらの詩行に潜む箴言のような一節。「思うに、歳をとるにつれ、人に必要となるものはふたつ、歩くこと、そして詩だ。」

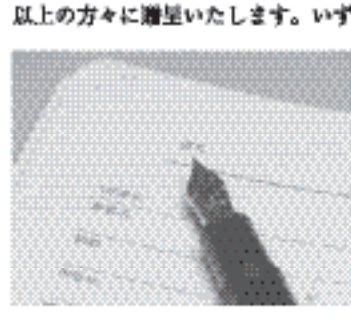
月刊雑誌 《みすず》 最近号より

みすず書房創立70周年記念

この秋にかけ、さまざまなイベントを計画しています。購読者の皆さまへの記念の品もご用意しました。長きにわたる読者の皆さまのご支援に、あらためて感謝いたします。

MISUZU 読書ノート

折々の読書の記録や感想等を書き記すことができる特製ノートです。 ●東京国際ブックフェアの小社ブースで3冊以上お買い上げの方 ●本紙に挟み込みの「購読申込」ハガキで7月末日までに本体価格合計10,000円以上ご注文の方



A5変形判(207×150mm) 上製 クロス紙 128頁 非売品



東京国際ブックフェア 服部文祥さん トーク&サイン会 「サバイバル登山のすすめ」

『ツンドラ・サバイバル』を上梓する登山家が、岩魚を釣り、鹿を撃って、日本の山から北極圏までを生き延びるサバイバル登山の醍醐味をスライドを交えて語ります。

7月4日(土) 13:00開演 人文・社会科学イベントスペース 無料(事前の申し込みは不要です)。

【予告】今秋、MISUZU 読書夜会を開催 10月10日から11月5日まで、5回にわたってトークイベントを開催します。出演者は、池内紀さん、長瀬素月さんほかです。詳細は本紙次号、小社ウェブサイトでお知らせします。

抗生物質と現代病との関連

マーティン・ブレイザー
山本太郎訳

《失われてゆく、我々の内なる細菌》

ヒト一人の体に棲む細菌は約100兆個。重量は脳に匹敵する。一方、ヒトに由来する細胞の数は30兆。つまり人体を構成する細胞の約七割がヒト以外の細胞だ。

この細菌叢(マイクロバイオーム)が今、注目されている。それは人体の生命維持に不可欠で、抗生物質等によるその喪失は肥満、アレルギー、喘息といった現代病との関連が指摘されている。抗生物質等によるその喪失は、薬剤耐性菌という深刻な問題も生む。それは病院で処方される

患者とともに生きた足跡

松本雅彦 《日本の精神医学の五〇年》

日本の精神医学はこの五〇年で大きく変わった。精神療法の現場に立ち続け、精神医学の重要書の翻訳を手がけてきた著者が、病院での体験を軸に、日本の精神医学五〇年のあり方を振り返る。

有効な抗精神病薬がまだなく、隔離中心の時代。治安優先の精神医療政策と粗悪な民間私立病院の乱立。病棟の配置と患者の暮らし。精神分裂病患者の多さ。精神医療改革運動。DSM-IIIの導入による精神医学の変貌。統合失調症患者の激減。薬物療法の全盛。患者とともに生きた足跡

を振り返り、変貌する日本の精神医療を見つめる、このうえなく貴重な証言。

「精神医学」(七月下旬刊) (四六判200頁・予二八〇〇円) ▼関連書 ジャネ『心理学的自動症』松本雅彦訳(七〇〇円) ガーティナー編著『狼男による狼男』馬場謙一訳(五四〇〇円) 中井久夫『統合失調症の有為転変』(三三〇〇円) 木村敏『関係としての自己』(三三〇〇円) 笠原嘉『境界研究の50年』(三六〇〇円) 『精神科医のノート』(二二〇〇円) 成田善弘『精神療法の本棚』(三三〇〇円) 他。

「精神医学」(七月下旬刊) (四六判200頁・予二八〇〇円) ▼関連書 ジャネ『心理学的自動症』松本雅彦訳(七〇〇円) ガーティナー編著『狼男による狼男』馬場謙一訳(五四〇〇円) 中井久夫『統合失調症の有為転変』(三三〇〇円) 木村敏『関係としての自己』(三三〇〇円) 笠原嘉『境界研究の50年』(三六〇〇円) 『精神科医のノート』(二二〇〇円) 成田善弘『精神療法の本棚』(三三〇〇円) 他。

ファイマン経路積分、新版出来

ファイマン/ヒップス 《量子力学と経路積分》 新版

一九六五年に原著第一版が刊行されて以来、世代を超えて学究の徒にインスピレーションを与え続けてきた『量子力学と経路積分』に新版が登場。経路積分の生みの親というべきファイマンがカルテックでおこなった講義をまとめた無二の書である。

二〇〇〇年にDOVER社より刊行された原著新版は、ファイマンの創造的苦闘の痕跡はそのままに、旧版に八百箇所以上含まれていたテクニカルな誤りを訂正したうえで、一部の数式をより明確な表現に組み直し、最低限必要な注を加えている。このたびその日本語訳をようやくお届け

新装復刊 7月

次のロングセラーを新装版で復刊いたします。

■独自・鮮明なルソー像を描出した基本書。E・カッシーラー『ジャン・ジャック・ルソー問題』生松敏三訳(二三〇〇円) ■《透明》をキー概念に内面的伝記を構成した画期的な研究。J・スタロパンスキー『ルソー 透明と障害』山路昭訳(四五〇〇円) ■一九一八年、三六歳の年から四年の自死直前まで。創造の苦しみと楽しみを生きたと伝えるV・ウルフ『ある作家の日記』神谷美恵子訳(四四〇〇円) ■うつ病をめぐる議論の尽きない現代に、精神科臨床従事者必読の書。笠原嘉『うつ病臨床のエッセンス』(三三〇〇円) ■研修医から精神科志望者まで、診断学への入口に最適の一冊。山下格『誤診のおこるとき』精神科診断の宿命と使命(三三〇〇円)

受賞図書のご案内

ケヴィン・ケリー『テクニウム』服部桂訳(小社刊、四五〇〇円)のカバーデザインにより、川添英昭氏が講談社出版文化賞(ブックデザイン賞)を受賞されました。



戦後70年 みすず書房 70年



戦後70年、みすず書房も70周年を迎えます。

人間の偉大と悲慘を描いて今日も読み継がれるロングセラー、フランクフル『夜と霧』霜山徳爾訳の初版は一九五六年度です。今夏はウイレンベルク『トレブリンカ叛乱』を(本紙二面)、秋から来年にかけて武井彩佳『戦後ドイツの過去政治』、タース『動くものはすべて殺せ』、ピアード『ドイツのために死ぬこと』、富田武編『シベリア抑留関係資料』、ヒレッキ『アウシュヴィッツ潜入報告』、パウゼヴァング『片手だけの郵便配達人』、ソー『慰安婦問題論』を刊行予定。ご期待ください。

東京国際ブックフェア 2015のお知らせ

年に一度の本の祭典「東京国際ブックフェア」が、7月1日(水)から4日(土)までの四日間(一般公開日は後半の二日間)、有明の国際展示場「東京ビッグサイト」で開催されます。みすず書房は例年どおり「書物復権の会」の一員として出展いたします。「書物復権」会員の共有

みすず書房 営業部だより

一九四五年に創立した弊社今年で七〇周年を迎えることができました。読者の皆様方に支えられてのことであり、深く感謝申し上げます。昨年末に刊行したピケティ『21世紀の資本』山形浩生他訳は高額な専門書にもかかわらずベストセラーとなり、七〇周年を飾るべきこととなりました。引き続きご期待に応える話題書を刊行してまいりますので、今後ともご愛読よろしくお願いたします。七〇周年記念のブックフェアを全国の主要書店にて開催いたします。書店店頭が弊社書籍との新たな出会いの場となつて、読書の喜びを多くの方々にお伝えできればと心から願っています。

書物復権

2015
10社共同
リクエスト復刊

世俗の形成

キリスト教、イスラム、近代アサド 世俗的近代性を再考し近代の権力と宗教的伝統を再配置する試み。中村圭志訳 ¥6200

帝国の時代

1875-1914 [全2巻] ホブズボーム 経済、消費、労働、科学技術の変容を描く。野口建彦他訳①¥4800②¥5800

フランス憲法史

デュヴェルジェ アンシャンレゲームから第五共和制まで。全憲法を分析。時本義昭訳 ¥3500

アーレント政治思想集成

1 組織的な罪と普遍的な責任 1934-50年の思考の全貌。不朽の論考「実存哲学とは何か」他22篇。齋藤・山田・矢野訳 ¥5600

アーレント政治思想集成

2 理解と政治 「人類とテロル」全体主義の本質について「理解と政治」他19篇。齋藤・山田・矢野訳 ¥5600

みすず書房 近刊のお知らせ

7-9月の刊行予定から

- GDPについて
ダイアン・コイル 高橋璃子訳
- 日本鉄道歌謡史 [全2巻] 松村洋
- 大山猫の物語
C. レヴィ=ストロース 渡辺公三他訳
- 戦後ドイツの過去政治
武井彩佳
- 遺伝子の科学哲学
ジャン・ドゥーシェ 佐藤直樹訳
- 動くものはすべて殺せ
ニック・タース 布施由紀子訳
- チェスから武術へ
ジョッシュ・ウェイツキン 吉田俊太郎訳
- 死と看取りのために
ジャン・ドメニコ=ボラージオ 佐藤正樹訳
- セザンヌ
アレックス・ダンチェフ 二見・蜂巣・辻井訳
(http://www.msza.co.jp にもご案内)

みすず書房・最近の重版より

- 零度のエクリチュール [新版]
R. バルト 石川美子訳 ¥2400
- アイヒマン論争——ユダヤ論集 2
H. アーレント 齋藤純一ほか訳 ¥6400
- アメリカの反知性主義
R. ホーフスタッター 田村哲夫訳 ¥5200
- 自閉症連続体の時代
立岩真也 ¥3700
- 福島原発事故をめぐって
山本義隆 ¥1000
- ソミア——脱国家の世界史
J. C. スコット 佐藤仁監訳 ¥6400
- 自分だけの部屋
V. ウルフ 川本静子訳 ¥2600
- 狩獵サバイバル
服部文祥 ¥2400
- 建築を考える
P. ツムトア 鈴木仁子訳 ¥3200
- 植物が出現し、気候を変えた
D. ビアリング 西田佐知子訳 ¥3400